

宮崎直生校訂

新訂 西洋紀聞 を読んで

杉井 六郎

本書は平凡社から東洋文庫 113として公刊された。『折たく柴の記』について宮崎直生教授の多年にわたる新井白石研究の成果を注入された一大力作である。

周知のように、白石の『西洋紀聞』に關しては、はやく、大槻文彦博士の校訂になるもの、ついで、村岡典嗣氏の校訂にかかるものの二種類があるが、宮崎教授は、白石の自筆本を底本に校訂された。したがって、この『新訂西洋紀聞』によつて、従来の不兎全さを克服して、われわれは『西洋紀聞』の成立当初の姿を見ることがで

きるようになった。

本書は、まず『西洋紀聞』の本文の校訂部分九八ページ、ついで、これとほとんど同じページ数におよぶ三〇余の注がほとんどこれ、つぎに、本文部分の三倍におよぶページ数をつかつて、關係史料三一点、それに參考二点が付録として收載され、さらに、解説・略年表・文献案内などを加えて、すべて四七六ページにおよぶものである。注・付録・解説の各部分はそれぞれ補完の關係をまして、本文校訂部分に対して、注釈部分を形成してい

る。

× × ×

さて、歴史学における史料批判、文献の校訂注釈の作業については、いまさうことあらためて論ずるまでもなく、研究の基礎であり、基本的作業であるが、いま、一つの例をあけて考えてみると、例えは、幸徳秋水の『社会主義神髓』(明治三六・七刊)の場合である。これが近代日本の社会主義思想および運動の展開に与えた影響は、ここで証明するまでもなく明らかである。しかし、幸徳秋水の研究が、日本の社会主義思想あるいは社会運動究明の立場から、さかんになされるわりには、当時の幸徳が到達していた社会主義思想の本質的理解に關する内外文献も参照した再念な文献学・史料学的な検討は、まだきわめて不十分といわなくてはならない現情にあることを認めねばならない。幸徳の『社会主義神髓』は、現実には、カーカツスの『社会主義研究』

(T. Kirkup: *An Inquiry into Socialism*)

に主として典拠しているといわれる。それは、幸徳自身においても、「初等少年の爲めに特に之を言う」として、自序の末尾に八冊の文献リストをかかげ、そのなかにカーカツスの文献を指摘し、従来、そのこと自体はよく知られていることである。しかし、幸徳の『社会主義神髓』のどの部分に、どの程度、どのような理解の深淺をもつて、カーカツスの『社会主義研究』が消化されている

かという分析的検討は、まだ、寡聞にして聞かない。向題は幸徳に限らぬのであつて、おまそ、幸岡・恩想については政治経済宗教など各般の分野において、こつした内外の文化交流・交渉の歴史的事実の綿密な検討という段階をふまえて、それぞれの思想あるいは、その展開の核心にせまる研究が今後進められねばならないのが現情であると思う。

筆者があえて、とつぴとも思える幸徳の『社会主義神髓』をあけたのは、原本の校訂または注釈作業が比較的に有効、適切に行えるという事件がありながら、なされていらないという問題を考えるからであつて、それを新井白石の『西洋紀原』の成立過程に介在する条件と比較すれば、その難易さにおいて、大きな差違を認めねばならない。そうした点で、シドナからの聴取調書という性格をもつ『西洋紀原』に校訂をほどし、内外の研究および史料を準拠として注釈を付された教授の辛苦はなみだいていのものでないと思はざる思いである。

しかし、上述のような思想・文化の交流・交渉(国内外を問わず)に關する文献学的な考証・検討は、じつに、すぐれて豊富な学識を要求されるとともに、きわめて地味な作業であつて、労も多い。したがつて、とかく、「歴史法則」の援用、あるいは、系統的な範疇を設けた「パターン論」、すなわち、「土着論」、「日本化」といふような類型を設定してみたり、あるいは、正

「異端」という論法でなできつてみたり、さらに、並行する。祖述・継承をひいては、「繙纂」というレ・テルを付して又たりするなど、総じて短兵急な研究が中心であつて、しかも、それういう諸方法論が流行するなかで、研究は個別化し、停滞しがちである。

さきの「土着論」などは、こうした研究状況から脱却しようとした一つの試みといえなくもない。そういうことは、「土着論」が研究法として意味を持たないなどというのではない。個別化し、分散化し、あるいは硬直化しても研究状況のなかで要請された一つの教訓であることに十分には向かない。しかし、こうした教訓にとんぱ検査の法則が容易につかわれるまえに、事実そのものの綿密な検証がなくてはならない。科学としての学問としての学問として、それは当然のことである。

しかし、筆者が、ここで、いまとくに問題にしたいのは、上記のような文化交流・交渉の歴史事象を究明するために、それぞれの歴史的展開のたんなる比較検討という手法を奨めるものではないといふことも付言しておくべきではない。それは、「比較」は「相対」を見つけたものである。すなわち、比較対象の任意抽出は概念化を助けてくれます。絶対的な事実そのものの究明は証言をたてる現象におきざりにされる危険を伴うからである。

しかも、現実には、日本の近世以降、近・現代の歴史事象に關しては、上述のような観点からする基礎作業が、

実際には、さらに強く、深く求められねばならぬのに、「国史」または「日本史」という視点を固執したり、あるいは、「典拠」や「標準」を「西政」に求めたり、反対に、「アジア的」もしくは、「日本的特殊性」に帰着するなどの操作がしばしば繰り返される。こうしたもろもろの欠陥に對しては、すでに反省もうながされながら、また歴史の実証的な作業のうえで、必のりゆたかなものになりつあるとはいいいざれない現状である。

× × × × ×

ゆらい白石はゆたかな伝統的学問の手法に加えて、新しい知見を求めて一八世紀初頭、日本における洋学開宗の先達となった人である。かれの日本古代史にむけた合理主義的思惟による諸業績とともに、『采覧異言』、『西洋紀原』の提起した学問・思想は、いまなお、思想史の上で引き合いに出されたり、回顧されたりするほどの生命を持ち続けている。そうした意味で、この校訂注釈は白石学研究のほんとうの土俵を形成するばかりでなく、洋学の勃興、ひいては実学思想の展開にいたるまでの、わが国における近代的思惟形式に關する研究の上で、基本的な土台の一部を構成したといわねばならない。

× × × × ×

筆者は、「新訂西洋紀原」をプリンストンで手にして、まず、この良肉を不思議に思つたことであつた。それは、江藤淳氏がプリンストン大学に日本文化交流の研

究員で渡つたころ、当時朝日新聞に寄稿した記事を読んで、「東洋の直徳・西洋の機械」ということは新井白石の提唱にはじまるというくたりに見て、その評論家としてのたくみな推考に感心しながら、とんでもない商産を犯していると思つたことがあつた。それが悪いがけぬことには、同氏と同じ諸指で、ところも同じフリンストン大学に赴き、しかも、たまたま、佐久間象山を研究テーマとする大学院学生と出くわし、象山の「東洋の直徳、西洋の芸、匡廓相依りて圈撰を完うす」という思想（表現）の源泉を考へることになった。歴史的事実として、白石の言葉にこれがあるとする——江藤氏のこの朝日新聞寄稿記事は、そのまま、かれの「私の見たアメリカ」に収められたが——その誤りは明白である。しかし、かれの指摘しようとした蘭学——洋学の系譜、すなわち、日本における当代の西洋学者の系統に、そうした思想が流れ続けたであらうとする評論は、歴史的事実の誤認は別として、すぐれて示唆にとんだ問題指摘であると筆者は考へていた。したがって、本書を手にしたとき、開巻まず探してみたのは、白石の「形而上学」、「形而下の学」という分類と表現とはどのように注釈されているか、また、白石のいう「教法」は、どのように校注されているか、さらに、「形而上の学、形而下の学」の考へは、どのような系路を経過して、幕末期の佐久間象山、橋本左内、横井小楠の思想にいたるのか、という点であつた。

しかし、正直なところ、これらの期待を本書はすべてにあつて満すものではなかつた。とくに、「西洋紀聞」の流伝に関して、教授は寛政五年の幕府献上を契機に、「新刊に伝写の道がぬけた（中略）これらの伝写についての私の探訪は未だ済んでいない」（四四五ページ）とことわつておられる。その点では、白石が簡潔な表現でありわした有名互学問の構想の流伝の軌跡はまたカエールにつつまれたままなのである。しかし、そういう厳正な限をめぐらわねながらも、「西洋紀聞」の伝写が幕府系統のほか、国学者または水戸学派の人びとに伝へ写され、そこでは、白石の主張が排耶論において継承されている（四四二—四四四ページ）ことを認めておられる。付録に収められている会沢正志高の「三眼録考」（四〇六—四一〇ページ）の拠証はそのよい例なのである。その点では、「多数の写本の存在を想定することはできない」（四四四—四四五ページ）とはいへ、江戸中・末期の洋学者の間には、具体的にどうであつたのか、筆者はあらためて学問のかたを、直に直程を思い、かつ、これを直求される教授の執念にも似た苛苦に深い敬意を覚えたのである。しかも、また、「白石のキリシタン観、西洋學術親の影響ないし感化（中略）どちらかと言へば、後者の方が作用が大きいと認められる」（四四五—四五六ページ）、「極東における政治情勢の緊直化にもなつて、白石の洋学観は、一層ふかく浸透していったと認めて差支ない

であらう。(中略)渡辺華山、高野長英の経世策にも、また同じく、(中略)佐久間象山や橋本景岳(左内)の南園重取の方策にも、その投影を私は見る」(四五四ページ)などという叙述に接するにつけ、回路探求に關する望蜀の愚念を断ちがたかった。それは單なる排耶論の展開ではなく、〃和魂洋才的學問の態度〃の系譜上の実体的追究であり、近代國家の形成過程における近代的學問、思想への態度を溯及する問題だからである。もちろん、筆者も、本書の注釈部分にこのような期待をもつて望むことは、あるいは、教授の真意に及するかもしれないとも反省する、なほならば、編集企画の指示にしたがへたのか、[『]采覧異言[』]の流伝に關する列証も、[『]ターマ証契[』]を挙げることを差し控える」(四五四ページ)とあって、深い言及はされていないからである。

とまれ、本書に対する筆者の期待と立場から、本書を紹介する本来の趣旨を逸脱して、教授の校訂注釈作業に手前勝手な見解をながながと述べた失礼のお許しを乞ひ、かつ、筆者の願望が当をえていないことを深くおそれるものである。それは本書の企画と構成が、[『]西洋紀原[』]の流布伝播、その學問思想の影響・感化に力点をおくというよりも、実は、より多く、その成立事情に精魂を傾けていられるからである。しかも、本書は、まさに、その点において、校訂注釈の特色が躍如としていているといえるからである。